

渋沢と横浜焼き討ち計画

COLUMN

県内
大学発

経世済民

568

埼玉学園大

これまでこのコラムで渋沢栄一を取り上げるにあたっては、その長所や実績および人間的な魅力などを中心に述べてきました。しかし、渋沢を正しく理解するために、若気の至りで暴走した時期もあったことを認識しておくことが有益と思われるます。

92年近くの生涯において渋沢が活躍したのは主に20代後半以降、つまり、明治維新後の60年以上の長きに及びます。しかし、20代半ばまでの渋沢は、農民と

いう立場で封建社会の矛盾に悩み、尊皇攘夷思想を信奉する壮士的な一面をもっていました。壮士といえば勇ましいイメージですが、その実、渋沢は自ら犠牲となつて封建社会の崩壊につながる導火線の役割を果たすという、いわばテロリストともいふべき過激な考えにとりわ

大江 清一

経済経営学部特任准教授



鎌倉街道沿いに南下して横浜の外国人を襲い、関係のある建物を焼き討ちしようというものでした。渋沢は当時世の中を変えたいためには、自らが犠牲となつて騒動を起こし、それをきっかけに自分の考えに賛同する同士たちが自分の意志を引き継いで、世直しを遂げてくれることを根拠なく信じていたのです。そこには現実を見据えた計画性や確固とした将来展望は存在しませんでした。

この計画は仲間の尾高長七郎の反対に阻まれて幸運にも未遂に終わりました。しかし、もしこの計画が実行されていれば、日本の資本主義は現在と大きく異なるものとなっていたことは間違いないと思われま

その後、浪人となつた渋沢は縁あって一橋家に仕官することとなり、実力を認められて重用されますが、維新後は皮肉なことに権力を奪われた側に身を置

くこととなりました。しかし、新たな権力サイドである明治政府は渋沢の評判を聞きつけ、政府機関の重要なポストである大蔵省の租税正(そぜいのかみ)として渋沢を迎え入れます。その時に渋沢を説得したのが現在

の財務次官に相当する大蔵大輔(おおくらたいふ)の地位にあつた大隈重信です。その後の渋沢の活躍はよく知られている通りです。このように、渋沢は時代の流れと運命に散々に翻弄(ほんろう)されますが、各節目において渋沢の運命を好転させたのは、渋沢の実務実力と誠実な人柄、およびそれを正当に評価してくれる人々の存在であつたと考えられます。

徳川家が権力を失つた後も、渋沢は元の主君である徳川慶喜の名譽回復に尽力し、大蔵省時代の上司であつた井上馨を自らの手本として尊敬し続けました。「日本資本主義の父」として今や多くの人々から尊敬されている渋沢ですが、血気にはやひすきて、危つく道を踏み外しかけた時期を経験していることを含めてその生涯を振り返ると、私たちの郷土の偉人がより身近な存在として感じられるのではないでしようか。

おおよそ、せいいち 1902年生まれ。慶応義塾大学経済学部卒業。埼玉大学経済科学研究科博士課程後期修了。博士(経済学)。第一勧業銀行(現みずほフィナンシャルグループ)、いすゞ自動車(株)、神奈川大学経済学部非常勤講師を経て、2016年4月から現職。専攻は経営学、金融史。主な著書:『義利合一 説の思想的基盤』(時潮社、2019年)、『銀行検査の史的展開』(時潮社、2011年)など。